

くらし・家庭

谷中のリボン

③ 山崎 範子

5人の仲間と書いた論文は「欧化主義の中心地、東京の明治のリボン産業」。2016年3月の『産業考古学』(現在は『産業遺産学会誌』)第153号に掲載された。

執筆準備をする中で、日本で初めて洋式リボンが生産された台東区谷中は、モノづくりの最先端の地であることを改めて確認す

る。明治・大正期の近隣の地図では、リボンのほかにも医療器材・ゴム引きシート・レンズ・ネクタイ・団扇・製館などの産業を見つけることができた。

また、断髪令に始まる洋装への強力な後押しは、男性の照れ隠しだけでなく、日本が文明国家であることを知らしめる国の強い誘導であることもわかった。戦時には、リボンは美しい装いではなく、包帯やパラシュー

「ある男」展の出会い

トの紐、軍服を飾る勲章や水兵の帽子などに多く使われた。それでも魅了されるのは、見本帳に残されたリボンの美しさだった。19世紀末から20世紀初期に織られたものと思われるリボンの見本帳は、2種類に区別される。

一つ目は、渡辺四郎が海外から取り寄せたり、持ち帰ったと思われる舶来品。量もいちばん多く、図柄の美しさも群を抜いている。フランスやイギリスで織られたものが主で、図柄には文字、楽譜などが極めて精緻に織り出されている。ポートレートや物語の挿絵のようなものも多く、広く同じ情報を届ける複製技術品として、リボンが利用されたことが分かる。

二つ目は、谷中のリボン工場で織られたリボンの商品見本。紳士の帽子用のリボンが多いが、かわいらしい図柄の女性用のものも目を引く。日独伊の国旗をデザイン化した時代背景を表すものもある。会社名や商品名のある織ネームやタグからは、取引先の情報も知れた。

これらをまずは地元の人に、じっくり見てもらおうと企画したのが、文京区千駄木の「古書ほうろう」で開催した「谷中とリボンとある男」展。この展覧会と、その後情報を持ち寄ったリボン会議で、これらの資料を次代に伝えてくれる人に出会うことになる。

(谷根千工房)

(金曜掲載)



物語の一節を織り込んだヨーロッパのリボン